

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4071800702		
法人名	有限会社 ケアサービス九州		
事業所名	ふぁみりー菰田		
所在地	福岡県飯塚市菰田西3丁目9-10		
自己評価作成日	令和2年9月11日	評価結果確定日	令和2年10月10日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートうりずん
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号
訪問調査日	令和2年9月19日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

基本理念に含まれる、自立、自己決定、生活の継続を意識して日々のケアにあたっている。家族会などで本人の以前の暮らしを聞き、利用者の持てる力を引き出そうと努力中です。また、地域との交流のため管理者が自治会の定例会に随時出席している。昨年の認知症SOS模擬訓練第2回が事務所所属の自治会で立ち上がり、管理者がコーディネーターとして招待され、地域の認知症啓発活動に職員共々参画できた。今年度も継続して行う予定である。認知症サポーター養成講座も依頼が増え、昨年も市民講座として代表が出向くことができた。地域との距離も近くなり、最近では、台風の時の浸水予防(玄関に水土嚢を設置)を地域の方が手伝いで来て下さった。地域との良い関係を大切にしていきたい。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開所以来玄関は広く開けられ、「感染防止の強化、過信しないケア」を月目標に掲げ、朝夕の申し送りや周知や振り返りをし、理念の具現化に努めている。敬語で入居者に選択や決定を促す声かけの実践で、その後の支援が円滑になるなどコア会議の成果が伺える。思いや意向を把握すべく、全職員で担当入居者との3分間トークに励み、代表者は入居者が現役時に流行したマンガ本や小説を持ち込んでいる。系列事業所間で職員の異動もあり、代表者が教育プログラムに沿った人材育成で、生き生きと就労できる環境づくりや職員の定着に繋げている。コロナ禍の中、アイパットやパソコンなど通じて入居者と家族が面談できる場を設ける予定で、今年度の認知症SOS模擬訓練も昨年同様、代表者が企画の段階から参画し、地域密着型サービスの展開が期待できるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

ユニット/
事業所名 **ふぁみりー菟田**

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	朝の申し送り時に「理念」を唱和。また、理念を意識した月目標を掲げ意識統一を図っている。さらに新たに「コア会議」の時間を設け一日の支援の統一に取り組んでいる。	朝夕の申し送りで、月目標の「感染防止の強化、過信しないケア」、敬語で入居者に選択や決定を促す声かけの実践を周知徹底し振り返りをしている。支援が円滑になると話す職員もあり、コア会議の成果が伺える。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナの影響で地域との交流は自粛中だが、例年は、いきいきサロンや子供の廃品回収に参加。ケアカフェやホームで行う行事には自治会回覧板を活用させて頂いている。自治協議会には26年より参画。	カフェはホーム2階で5月まで開催され、3月は地域から3名の参加があり、今後の開催を模索している。代表者は認知症に関する市民講座の講師を務め、今年度の認知症SOS模擬訓練も昨年同様、企画の段階から参画する予定である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	代表は、認知症サポート養成講座や市民講座の講師を数多く引き受け、昨年は地域主催の認知症声掛け訓練のコーディネーターの声もかかり職員ともども企画から参加。地域の人たちとよりよい交流が出来ている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	サービス評価の結果と取組み目標を話し合ったり、避難訓練、利用者の自立支援、勉強会の内容など、様々な話題で有意義な検討会が行われている。今年度は2月開催だけとなっている。	身体拘束適正化委員の兼任をお願いしている運営推進委員に、書面にてホームの状況や身体拘束適正化の取組みを報告し、意見の表出や地域情報の提供をお願いしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域包括支援センターの担当者、市の訪問調査員等とは随時連携は取っている。また、代表が連絡協議会の会長を引き受けたこともあり行政との協力、連携は密に取れ易くなった。	民生委員から市に報告された職員の接遇に関して、市に改善の取組みを報告している。職員の聞き取り、職員会議の開催、運営推進会議での報告などの経過を詳細に報告し、指導を仰いでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束「0」を宣言し、身体拘束廃止委員会ですり替え「0」更新に向け協議を徹底して行っている。運営推進会議での報告は毎回欠かさず行っている。	身体拘束適正化の話し合いや内部研修を継続している。開所以来、日中玄関は広く開けられ、日々入居者の言動や気配を察知した声かけや対応を実践している。早朝2階会議室に上がられた入居者があった。管理者は足が悪いのにと心配しながら、2階から庭の畑を見たかったのではと話している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束の検討会議に付随して、虐待の芽シートを活用して職員の意識調査確認を行った。ミーティングでこのシートを職員全体で討議し、虐待にいい繋がりかねない行為を改善する目標を設定している。今後も継続していく予定です。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度の概要をいつでも、誰でも見られるよう用意している。新管理者が研修を受ける予定だったが延期となっている。	代表者が後見人を引き受けた経緯もあるが、現在は日常生活自立支援事業や成年後見制度の活用はない。状況に応じて説明するために、事業や制度に関するパンフレットを整備している。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時の説明に加え契約者の質問にも十二分に時間を費やしている。最初の看取りに関する話し合いもここで行っている		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱は十分に活用されていないが、家族会を開催し家族の意見を聞く機会を設けている。また、運営推進会議にご家族の出席もあり、屈託ない意見交換が出来ている。今年は残念ながら例年通りにはいってない。	玄関入り口の円形テーブルに体温計や消毒薬などを設置し、来所家族は管理者や職員が対応している。日頃の状況は手紙や電話で連絡しているが、アイパットやパソコンなど通じて入居者と家族が面談できる場を設けたいと運営者は話している。	運営に関する家族等の意見を伺うために、様々なツールで入居者と家族の面談の創出や家族会の再開を期待します。
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	基本、ミーティングで率直な意見が出されている。必要に応じて個人面談を行っている。日常的にも代表者及び管理者に細かな相談が行えている。	朝夕の申し送りで支援の周知や振り返りを実施し、定期的な会議で、率直な意見を話し合っている。代表者や市内の系列事業所管理者などの参加で、系列事業所間で職員の異動もあり、人事に関する意見交換が行われている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	就業規則の改定を行いキャリアパス要件を今年度は追加した。休憩場所の確保、親睦会制度、永年表彰制度などの導入などもおこない、近年では子連れ出勤を可能にした。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	70歳まで継続雇用を詠っており、年齢、性別で判断しない。地域においても個々の能力が十分に果たせるよう勤務面に対処している。又、家庭を大切にすることを優先できる勤務体勢に配慮している。	30代～60代の職員が勤務している。中には家族介護相談の来所がきっかけで入職し、介護福祉士の資格を取得した職員もある。認知症に関する講座などで講師を務める代表者が、教育プログラムに沿って人材を育成し、職員の定着に繋げている。地域の福祉や民生委員としての活躍や子育てを支援し、生き生きと就労できる体制を構築している。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	年間研修計画(必須研修)に入れ込んでいる。社内では顧問の社会保険労務士によるコンプライアンス及接遇研修を年1回、必ず行っている。自治会開催の「人権教育」の場にも毎年参加し学んでいる。	内外の人権研修で、人権教育を実施している。虐待の芽チェックリストで、不適切なケアを自己及び他者の視点からチェックし、再発防止に丸となって取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	約400時間のOFFJT、OJTの研修を30年度は行った。受講資格者がいれば続けていきたい。個人研修は年2回以上とし受講料、交通費は会社負担、当日は勤務扱いとなる。代表は県の人材定着委員会のメンバーでもある。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	地域密着型ネットワークの会議に定期的に参加。運営推進会議も他事業所との交流もしている。同系列ではあるが職員研修で交流している。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人に事前に見学していただき、納得の上入居して頂いている。利用者の詳細な状態把握で生活歴が見えてきて、支援の統一性を見出すことが出来る。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	信頼関係の構築が介護の目標ととらえている。家族の要望はできる限り取り入れるよう心掛けている。歩行訓練などもその一つ。家族の思いと本人の思いが違う時の調整が苦心するところである。今は、手紙や電話等での対応となっている		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	当該施設ではまだないが、法人全体としては小規模多機能に紹介して在宅に復帰してもらったケースがある。他のサービスの利用もいつも視野に入れている。医療の選択も本人である。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の出来ることを奪わない介護を心掛けている。本人がありがとうと言われる機会をつくるのが大切である。畑の水やり、収穫、配膳、下膳、洗濯、掃除、等々共同作業がある。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	昨今はお互いに自粛している状態であるが、運営推進会議や家族会、誕生会に餅つきと家族の訪問頻度は多く協力的であった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	現時点では自粛生活で交流は厳しく、出来ないが、個人レクリエーションや美容室等、なじみの場所に行く支援や、友人、知人がいつでも来れる環境づくりを目指してきた。今後も大事にしたい。	家族への年賀状づくりが恒例となり、家族から年賀状をもらう入居者もある。利用料支払いに来訪される家族がほとんどで、関係継続を支援したいとコロナや台風見舞いを出す予定である。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日中はテレビは付けていない。利用者や職員が話しやすい場になる様、ホール内ソファの配置替えも行ったが、話し相手はいつも同じで決まっている。職員がもう少し入り込む支援が必要かと今後の課題である。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	殆どが亡くなったの退去である為、関係が薄れて行ってるのが実情ですが、「近くにきましたので」と立ち寄って頂けることも。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	お一人お一人との会話を大切にする中で、見えてきた要望や希望・嗜好等を情報シートに落とし込みミーティングなどで協議する糧としている。実行できることは即、行動に移す事で利用者と喜びを共有できている。	日頃の関わりから思いや意向を把握すべく、職員は担当入居者との3分間トークに励んでいる。訪問調査日、入居者が現役時に流行したマンガ本や小説を代表者が持ち込み、介護計画作成担当者に状況に応じてコーナーの設置を提案する場面もあった。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	センター方式を取り入れ、ご本人やご家族から今までの生活状況を詳細に伺いアセスメントしている。その内容を全職員が共有する為ミーティングや連絡ノートを活用し伝えている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	自立支援を基本に出来ること探しをしている。本人の言葉・行動を記録に残し、その日の心身の状態を訪問看護師とも連携して把握に努めている。家族とも話をを行い、出来るようなこと探しを行っている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	モニタリングは毎日チェックしている。ケアカンファレンスではその成果と新しい課題を協議、分析する。利用者、家族、職員の意見・要望をまとめ介護記録に反映するよう努めている。	介護記録に入居者の言動やケア内容、医療的ケアなどを印字の色を変えて記載し、モニタリングを容易にしている。食事の摂取量は少ないが好きな物は手づかみでも食べられる入居者は栗の試食後、昼食の栗や小豆ご飯を完食するなど、タイムリーなケアを実践している。	代表者が提案された入居者の意識レベルの確認、覚醒を促す工夫などで、より現状に即した介護計画の作成を期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	利用者の気づきは日々の業務日誌、介護記録に記録している。職員は様々な情報が書き入れられてる連絡ノートを出勤時に目を通し業務に入ること支援統一を図っている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族が何らかの事情で病院受診が不可能な場合はホームで柔軟に対応している。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	通常であれば地域開催のいきいきサロンや本人様ゆかりの地域でのサロンへの参加を支援しています。本人様は忘れられていてもご近所さんから声掛けがあり懐かし気に話を合わせられる姿を見る事もありました。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時ご家族、本人様の思いを確認します。かかりつけ医師の選択はできる体制をとっています。24時間対応で救急医療体制、連携も取れている。	今月初めに退院した入居者に、かかりつけ医から指示されたバイタル数値に留意した支援を行っている。状態の変化はかかりつけ医の往診時のもとより、訪問看護事業所を通じて連絡や指示を受けるなど、連携システムが稼働している。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1の訪問。入居者お一人お一人の状態に応じて適切な処置をされる。ホームとの連携は密に取れている。要望に応じてミーティングにも参加、医療的なアドバイスをいただく事も。24時間体制でのオンコールもしっかり機能している。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	家族、病院と情報を共有し合っている。入居者が安心して戻って来れるよう配慮している。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居契約時、重篤化、看取りについてご家族の意向伺います。状況の変化によって思いが変わることも視野に入れ、折に触れてご家族の思いが聞けるよう配慮している。ご本人には自然な会話の中で看取りを考えて頂いている。	契約時に指針を説明し、意向確認書を取り交わしている。現在のところ全入居者がホームでの看取りを希望している。この2年、看取りはないが、随時意向を確認しながら今後も看取りに関わる予定である。また、訪問看護師を講師に看取りを振り返る研修会で、職員の知識や技術の向上に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	事故発生時のマニュアルを作成。必須研修として学んでいる。事故発生後は訪問看護師による振り返りと実践的指導を受けている。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の火災・通報・避難誘導訓練は行っている。水害の場合は経験から避難場所は2階と定めている。非常食、P-トイレ、マットなど運び込む。	年2回、緊急通報システムを活用した通話訓練や水消火器を使用した訓練を行っている。水害時は2階に避難し、入居者の緊急連絡先や服薬に関する資料を持ち出す予定である。非常食などの備蓄は消費期限や数量を明記した一覧表を掲示している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	年間研修計画で「プライバシー保護の取り組み」を必須研修として学んでいる。プライバシー侵害とみられる行動があれば、その都度、注意、指導を行っている。職員同士が注意し合える環境づくりをいいていきたい	敬語での声かけや自己選択や決定を促す問いかけの周知徹底に努め、全職員が穏やかな対応を実践している。入居者も持てる力を発揮できる機会や場所を設け、尊厳ある生活の支援に努めている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	過去には「毎日お風呂に入りたい」「ご飯の後にはお漬物が欲しい」との希望があり可能な限り本人様の気持ちに添える支援をしてきました。日頃の会話の中から探して行く努力をしています。沢山の自己選択、決定が出る様に。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事・お茶・入浴等の時間はほぼ決まっているが他の時間帯は個々に過ごされています。その時間が寛ぎや癒しの時間になる様支援していきます。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	洋服選びは基本ご自分で選んで頂く様にしているこちらから「良く似合ってますよ」「いい色ですね」と言葉かけをするだけで身だしなみが整ってくる。どんどん誉め言葉を発していきたいと思えます。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	現段階では食事の準備(芋の皮むき、豆の皮むき)やテーブル拭き等お手伝いして頂いている。食事はテーブルを囲み職員も一緒に同じものを食べてます。	調査日は栗や小豆のご飯、キノコの白和えなどの5品が並び、彩や旬の味つけが食卓の話題となった。入居時から自前の箸や湯呑みを使ってもらい、職員の介助や見守りで、其々のペースで全入居者が完食している。誕生日はご本人の希望の献立で当日にお祝いしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分・食事の摂取量のチェックを行い、水分や栄養状態の把握に十分配慮しています。体調不良時は高カロリー飲料や調理方法、材料に工夫を凝らし提供している。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	お一人お一人の状態にあわせ声掛けや誘導で毎食後の口腔ケアを実施しています。又、希望者には週1回の歯科医師によるケアをしています。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	失禁があるからとむやみにオムツに移行はしません。トイレ誘導での排泄を心掛けている。また、チェック表を付ける事により排泄のパターン化を把握、より良い排泄を支援しています。パットの使用量を減らす効果も。	3ヶ所にトイレが設置されている。個々のパターンや行動を把握し、「トイレに寄っていかれませんか」などの丁寧な声かけで、トイレでの排泄を支援している。布パンツやリハビリパンツ、尿取パットの使用を支援し、夜間も前止めオムツやポータブルトイレは使用していない。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄チェックを取り、排尿と同じようにパターンを把握する。日頃の水分や食事(繊維物)に気を配る。困難な場合は医師の指示を仰ぎ対応する。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	本人様の希望があれば夜間を除きいつでも入浴できる体制は整っているが、一応入浴介助は3名(車いす使用者1名、自立2名)の対応で行っている。入浴前のバイタルは必須。	広く清潔な浴室は3方から介助できる個浴槽が設置され、入浴を億劫がる入居者には、対応する職員や声かけを変えて支援している。今月初め退院し、現在シャワー浴の入居者は、風呂が好きで毎日入浴していた経緯もあり、代表者から浴槽に浸かることを介護計画の目標にしてはとの提案があった。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	車椅子3名様内、2名様は午前・午後の2回居室にて臥床。1名様は午後のみ居室にて臥床を促している(足の浮腫軽減の為) 他の方はソファで傾眠される方が殆ど。夜はぐっすり休まれている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医師・薬剤師の指導のもと管理を行っている。服薬ミス防止の為、3人の職員が十分な点検と確認を行っている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の楽しみ、嗜好品を理解支援している。また、職員は個々の出来ること探しにも気を配っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	毎年行っているドライブ・食事・温泉が一度に楽しめる企画をし全員参加で出掛けます。今年はまだ実現できていません。	無断外出はないが、園内の畑を見に行く入居者もあり、言動や気配を察知した支援が行われている。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お一人を除いてはご家族との買い物は皆無。ホーム前の自動販売機で、飲み物を買うことで楽しんでいます。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	お1人の方が携帯電話を所持されご家との会話を楽しまれています。年末には担当者ともども年賀状を出します「字には見えないが嬉しい」「初めてもらったよ」等涙ながらに報告を頂いています。今月は台風お見舞いのがきを出す予定です。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂と居間がワンフロアになっているのでどの居室つからも集いやすく、ほとんどフロア一で過ごされている。柿のシーズンには窓の外は吊るし柿の暖簾が色鮮やかに見られます。玄関フロアも季節を感じてもらえるような工夫をしています。	コロナ禍の中、広く開けられた玄関はほっとできる空間となっている。以前玄関上り口の木製椅子で一人寛ぐ男性入居者の姿を思い起こせる佇まいは、現在もそのままである。昼食後、共用空間の壁に掲示された写真の下のソファで、ゆったりと穏やかな表情で寛ぐ入居者の姿があった。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居室にてご家族を初め知人や友人が気兼ねなく過ごして頂けるよう配慮しています。職員も個々の居室に入る際は必ず声掛けをする事を徹底している。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご自宅で使用していた食器類で食事をしてもらっています。以前はお仏壇を持ち込まれていた方が2名おられましたが現在はおられません。	居室入口に掛かったピンクの暖簾から花柄の布団カバーが掛かったベットや整理整頓された居室が垣間見える。今回はコロナ禍に配慮して見学できなかったが、以前のように野球帽が飾られた居室もある。そして、別々の居室で生活されているご夫婦が共に過ごす時間を、職員たちはそっと見守っている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	全館バリアフリーで手すりが回りにあり、至る所に休憩できるようテーブルと椅子を配置している。置いているものが障害物とならない様子を配っている。		